
万乗の途 勿忘の草

三河可可

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

万乗の途 勿忘の草

【Nコード】

N1531P

【作者名】

三河可可

【あらすじ】

十二国記を題材にした二次創作です。

舞台は尚隆の治世七百年を越した雁国。長い間自らが守ってきた玉座。延王尚隆はその終幕を自らの手で下ろしたいと願う。その願いに対し、延麒六太の思いは…。

宵語り（前書き）

『十二国記』 大好きが高じて、書いてしまいました。

原作読んでいるときから一番気になっていた雁国の最期。

その時延王延麒はどういう決断を下すのか。

ずっと考えていたことを一つにまとめてみました。

ちょっとした彼らしさを感じていただけたら、と思います。

宵語り

天帝の廟へと続く長い階段を上っていくのは、彼の主だ。

「待てよ」

必死の制止は、耳に届いていないのだろうか。この国に双つとない身分を持つその人物は歩を緩めない。

「待てたら、そんなところに用はないだろう？」

引き止めようと裳裾に手を伸ばす。

しかし、それは何故か空を切った。今一度試みるが結果は同じ。

彼は、延麒六太はそれでも主の背を追いかけた。

「尚隆」

あらん限りの力を絞れども、自分の歩の速さは変わらない。それどころか、時を経るごとに足が鉛のように重くなる。六太は酷い疲労感と脱力感にさいなまれながら、主に必死に追いつがった。

——ここで、離れてはいけない。離れたら…二度とこの手に…

疲労と、心中に渦巻く滂沱の感情に六太の顔が歪んだ。

目前に迫った天帝の廟は、音もなく開いた。まるで受け入れる事が自然であるように。

「…六太」

そこで初めて尚隆は振り返った。震えて俯いている金髪の少年に、確かめるようにもう一度呼びかける。

「六太」

幾度となくその声に名を呼ばれてきた。六太は振り仰いだ。いつものように横柄で、傲慢で、鼻につく笑みを浮かべる雁国の王がそこにいた。

「尚隆。何故、此処に来た」

「分らんか」

六太の頬を伝って一筋、涙がこぼれた。

——そうだ。目的などとうに分かっている。

けれど確かめずにはいられなかったのだ。

「尚隆、児戯も大概にしろよ。早く、早く冗談だって言えよ」

彼の言葉はもはや懇願であった。すがりつくような視線を断ち切るかのように、尚隆は毅然と言葉を発した。

六太が決して耳にしたくなかった一言を。

「位を返上する」

己の半身である麒麟を突き放すと、延王は開け放たれた廟へとさらに歩を進めた。

「お前は一人玉座を捨てる。では俺はどうなる」

地に膝をついて、麒麟は視線の定まらぬまま主の背に問うた。尚隆は振り返らず、答えを返す。

「残り国を守ることに。新たな王を据えること。そして新たな秩序を雁にもたらすこと。これが…」

主の言は、六太に反論を許さない。

「これが俺の最後の命だ」

尚隆は廟の中に消えた。

どうしても、どうしても六太はその背を追うことができなかった。直令を下されてしまった。それを容れてしまった。麒麟の本能が、それを反故にすることを許さない。

扉は閉ざされた。

止める事ができなかった。自分だけが残ってしまった。その憤り、悔い、慚愧の念。

激しく打ち掛かるそれらに、四肢が引き裂かれる思いがした。

「俺たちの運命は、一蓮托生じゃなかったのかよ」

もう何を言っても無駄な事は分かっているはずなのに…。

「……」

目を開けると、牀榻の中だった。陽はもう既に高いようだ。薄い帳から漏れる陽光に、六太は一気に現実に取り戻された。

「何て…悪い夢見だ…」

顔に残った涙のあとに気づいて、苦笑する。

「珍しいな。誰も起こしにこないなんて」

普段ならば房室付きの下官がくどいほどに起床の刻限を告げにくるのだが。辺りを見回しても人影は見当たらない。

「痛え」

身を起こすと頭が締め付けられるように痛んだ。

「尚隆の奴…飲ませやがって」

道理で目覚めが良くないはずだ。頭をさすりながら衾褥に顔をうめる。

＊ ＊ ＊
＊ ＊ ＊

「六太起きてるか？」

ひょいと尚隆が六太の房室を訪れたのは、夜半過ぎ。しかも両手に酒と杯を持参しての来訪である。

「この不良王」

言いつつも房室に入れてしまうのは、長年身にしみこんだ慣例とでもいうのだろうか。

杯を傾けながら交わす取り留めのない話。千年近く、よくも話の種が尽きないと思う。

尚隆は顔色一つ変えず、あっという間に一瓶を空けた。六太は付き合い程度に一杯を空け、すでに顔が赤い。

底なしのように次々に杯を空ける尚隆に、身体が成熟しないまま成長が止めたためか下戸である六太がいささかうんざりした刻。

「尚隆、その辺でやめとけ。明日の政務に障るぞ。朱衡が黙ってないぞ」

主に後者の理由から、本気で心配する麒麟の言葉に王は呵呵と笑う。「朱衡によっぽど摺り込まれてるとみえるな。放っておけ。それに」さらに杯をあおる。

「俺はこれぐらいの酒ではどうにもならん。小童と違ってな」

「俺は酒は飲めないが小童じゃねーぞ」

「御年おいくつで？」

「七百八十」

目が合うと二人は失笑をもらした。

尚隆は杯を今一度満たすと座から立ち上がり、改めて窓辺に腰を据えた。雲海は闇の中、打ち寄せる波打ち際が潮騒とともに見え隠れする。

窓の外を眺める尚隆の横顔は、険しかった。

「瀬戸内の小島で三十足らずの人生を終わらせようとしていた男が、八百年も生き延びている訳だ」

「しみじみ言うねえ」

一方が深刻な表情をしたら、一方は冗談めかして茶化さなければいけない。これがこの王と麒麟の不文律。

でないと、この終わりのない生、何か底なしの沼に堕ちるように気がめいるのだ。

「六太」

「あ？」

「お前は天命を信じるか」

「あ？」

尚隆の目は笑ってはいなかった。

——真剣にそれを聞いてくれるな。天命について、言及するな。

それは自らの崩壊を招く第一段階だから。彼の国も、彼の国も。己から発したその問いにより、己の内から均衡を崩したのだから。無意識に、六太は俯いた。その様子に尚隆は眉を上げる。

「お前は：都合が悪い事があると目を背けるな」

「都合が悪い時って、いつだよ」

「朱衡に怒られる時。大仁を通す為とはいえ、民に嘘をつかねばならぬ時」

凶星。嘆息。

「そして、今だ。俺の問いが聞こえていただろう。答えろ。お前は天命を信じるか」

繰り返されたのは簡潔な二択。

その声は、しん、と静まり返った房室によく響いた。

尚隆の視線は、微かに酔いを含んでいるものの、きちんと六太に焦点を結んでいる。その態度はあくまで真剣だった。

「それは：王が口にする疑問じゃねえよ。現に、俺は天命によりお前を王に据えた。そうだろう？」

尚隆は杯を置いた。六太に向けられたのは、強い光を放つ瞳。

千年の昔、蓬萊の瀬戸内の小島で向けられたものと何一つ変わらない。意志というものを具現化できるとしたら、このような瞳になるのかもしれないな、と六太は時折思う。

ますます逃げたくなった。

この場から。とにかく去りたい。

「六太。俺はもう八百年近く玉座にいる。八百年かけて、踐祚した

当初は一面の荒野だった此の国をここまで豊かにしてきた。いまや十二国全土の民は此の国を“夢源郷”とまで呼ぶ。年月の流れと：王の存在は一国をここまで変えうる事ができると体现してきた」

「それが、天命じゃないのか？」

「で、あればだ」

尚隆は杯に残った酒を一息にあり、長く息を吐き出した。

「俺の天命は尽きたかもしれん」

尚隆の思考はいつも飛躍が過ぎて、六太は追いつけぼりを食らった風になる。

酒が回り、睡魔にまわりつかれている今ならなおさら。

——それにしても今、尚隆は何と言った？

朦朧とする頭で反芻して、六太は驚愕した。

——何と言った？

目が覚めた。尚隆の顔は明らかに六太の反応を楽しんでいる。

「此の国の発展しすぎた文化は、十二国全土に反映をもたらすか」

「：からかっているのか？」

「答えは否だ」

尚隆は、彼特有の迷いのない瞳を向けた。

「十二国の理を乱すような度を越す発展は、不要だ。と、天帝はのたまう」

片頬で笑う。冗談めかしているが、その実は本気だ。

「この繁栄は我国と他国を隔絶させている。目下、玉座の空位が三。いずれも雁の近隣諸国だが、この数はあまりに多い」

沈黙するしかなかった。沈んだ国の末路を思うは、あまりに心痛激しい。

「まるで我国を崩壊に誘っているようではないか」

尚隆は高笑いした。その笑いにむかつ腹が立つ。

「笑うな!!」

人の心配を他所に、いつもあっけらかんとして笑って道を進んでいく。六太はどんどん置いてかれてしまう。

——口惜しい。

その気持ちが声を荒げさせた。

尚隆は肩を竦めてみせる。

「どうも麒麟は真面目で困る」

「：お前がそうさせるんだ。そんなこと口に出すな。」

「泣くな」

「泣いてねえ」

広げて置かれた大きな手は小さな頭をすっぽりと包み込む。

「馬鹿よ。お前にも分かりやすいように俺がそう考える理由を説明してやろうか」

「どうでもいいが、その字はヤメロ」

「嫌」と言おうが、何しようが、尚隆は今宵“その話”をしたいのだろう。だからあえて何も言わなかった。

「お前が初めて俺に此の国を見せた時、俺が何と言ったか覚えているか」

一拍おいて。

「：何も無ければ、それだけやりやすい：」

幾千秋過ぎてもはつきりと覚えている。黒い焦土の前に、一国の麒麟として己の肩に重く重くのしかかった責任をその一言で肩代わりしてくれた男。

あの情景、一言一句は昨日の事のように鮮明に脳裏に浮かべる事ができる。

「：良く覚えていたな」

六太が覚えていた事が意外であったようで、尚隆は目を細めた。

「人は何物なければそこから生み出そうと、創ろうと努力する。それが生きる為の絶対条件だからだ」

酒の力を借りて、尚隆は饒舌だ。

「王がいれば、災害は減る。妖魔は出ない。時が経てば明日の生活を保証される豊かさが生まれ、民は自らの生活の向上に乗り出す」

「お前の口上を聞くと、王は玉座に座っているだけでいいみたいだな」

「そうだ。要はそこに適宜留まればよい」

ただし、適宜、だ。

「生の時間の限られた人という存在は、常に最大の力でその生を生き抜こうとする。それが必ずしも良い方向に向く訳ではないのだ。直に蓬萊を見ているお前なら俺より分かっているはずだ。俺とお前の故郷、彼の島国は人の手によって永遠に失われた。人間が自然や神を超越しようと試みたが為に」

六太は黙した。そう、求めやまない故郷は、そこに住む人間が生み出した大量破壊兵器によって廃墟と化している。虚海を渡った六太は、八百年も前に見た一面の焦土を再び目の当たりにし、愕然としたのだ。

「神の存在しない蓬萊でもそうなのだ。まして此処は神の在る常世。雁の発展は、彼の国と相似形だ。これを天帝が見過ごすか。」

「それで、麒麟が失道するってか」

「国が生活豊かであれば、繁栄の裏に人の心に影が差す。麒麟失道、しいては国の滅亡は何も道を誤った王を正すものだけではない。道に背いた人を正すものではないかとな。俺は大綱に背いた訳でもなく、国を繁栄させすぎた故に天命を失うかもしれない」

「んなの、聞いた事ねえぞ」

「千年王朝は古今存在しない。俺たちの前例がないだけだ」

それは、未来に対する一抹の不安と、過去に対する寂寥を含んだ言葉。

「俺はんなことで失道なんてまっぴら御免だね」

強がった麒麟の物言いに尚隆は大様に笑う。

「ああ、俺だって咎無く麒麟が倒れるのは御免だ」

笑っていてなお、尚隆の顔が物憂げなのは気のせいか。

「邪魔したな」

六太の頭を支えにして（最後まで失礼な奴だ）立ち上がり、一瞥すると尚隆は房室を後にした。

一人残された六太は火照った身体と頭を冷まそうと、露台に出た。雲海の静かな波間に未だ眠らぬ関弓の街灯りが垣間見える。ちらちらと儚く揺れるその光は、いつか街中の雑踏で主と聴いた哀歌を思い出させる。

我は何処へ帰るべからん

「尚隆、お前はどこへ行くんだ」

夢覚めて

「台輔、お起きになつて下さいまし。いくら主上のご厚意とはいえど正午過ぎまで寝ておられるのはいかがかと……」

女官の声に再び目を開けると、六太は跳ね起きた。先ほど目覚めたときから、再び眠ってしまったのか……大分時が過ぎていゝらしい。帳越しに女官に問いかける。

「尚隆の……厚意？」

「ええ。主上が寝かせておくようにと。ご自分は珍しくも御自らの意思で朝議に出席なされたようで。朱衡どのも感極まっておられたと」

末官にまでこの言われ様、延王の立つ瀬なしである。雁国朝廷の寛容さと放埒さをよく表している。

いつもは輕口に乗して尚隆をぼろくそに挙げつらったあげく、調子に乗りすぎて下官から諫められる六太だが、今日ばかりは昨夜の一件に、昨夜の夢。

尚隆の行動に胸騒ぎを覚え、袍を一枚引つ掛けると被衫のまま、女官の脇をすり抜け房室を飛び出した。

「台輔、お待ちを！」

非難の叫びには振り返らない。振り返る暇はない。一路外殿へと駆けた。

*

*

*

$$*$$

*

「たつ台輔、いかなされた」

今の刻、官は政務中である。六太が尋ねた春官長大宗白朱衡も例に漏れず、膨大な書類に埋もれるようにして淡々と政務をこなしていた。

一段落ついた所で天井を仰ぎ一息。そこに駆け込んできたのは、被^ね衫姿の少年。あられもない姿の一国の宰相であった。

自国の麒麟の奇行には慣れているはずの朱衡もこれにはさすがに面食らう。

「朱衡！尚隆はどこだ！？」

——その恰好で駆け込んでおいて、一言目にそれか。

惘然とする朱衡。

「主上？朝議の後はお見受けしておりませんが：それより台輔。言いたき儀が山ほどあるのですがいかが」

「後で聞く」

朱衡も一瞬怯む必死の形相で、六太は踵を返した。制止の声を背に、諸官の視線を浴びながら外殿の回廊を駆け抜けた。

——正夢だ。

もはや、六太の中で予感^{予感}は確証に変わっていた。王の房室に許しなく踏み入る。本来なら麒麟として許されない越権行為だ。

房室は、いつもと変わりなかった。ただ、居るべき主がいなくて。

「尚隆」

六太の身体を五色の極薄い光帯が包む。

——なぜ、俺を置いていくんだ。

光は、六太にまとわりつき、絡み合い、彼の姿を異形のものへと変えていく。四肢の獣と化した六太は、開け放たれた露台の窓から果てしない雲海を澄んだ双眸で静かに見据えた。

二三歩たたらを踏むと、黄金の毛並みを持つこの世で最も優美な生き物は、鬣から光彩を引いて空へと飛躍した。

世界の中央、五山の頂が雲間に薄く姿を現した。徐々にその輪郭がはつきりと目に映るようになる。

——間に合え。

六太は切願した。宙を駆ける速度が一段と増す。

——みけより、俺の方が速い。

“みけ”は尚隆の騎獣の？ 虞である。二代目“たま”の後釜に飼われた。猫じゃあるまいしという六太の反対を押し切って尚隆が名付けた。

「とら、たまとくれば、もうみけしかないだろう。それに？ 虞には珍しく鹿毛の生えているこいつは、一応毛の色三色じゃないか」

よく分からない言い分ではあるが、別にムキになって反対する程のことでもなく、そのまま“みけ”は定着した。

その“みけ”が、厩舎にいなかった。

それは尚隆の外出を意味する。みけは尚隆以外のものは単独で乗せ

ないし、尚隆もまた他人をみけに乗せない。

そして、予想どおりの場所で六太はみけを見つけた。五山の中心崇山。

そこに騎手の姿は無かった。

「みけ、尚隆は？」

？虞は見慣れぬ獣の姿に警戒を露にしたが、すぐにそれを六太と認め喉をならして身体を寄せてきた。

「尚隆は？」

鬼気迫るものを感じたのか、みけは甘える仕草を止め、六太の問いに視線で答えた。岩場の奥に構えられた門へと。

「ありがとな」

六太は一目散に駆け出した。

* * *

朱塗りの門をくぐると、天帝廟へと長い階段が続く。

朧げに、その階段を上る人物の背が見えた。

覚悟していたとはいえ、身体中の血が凍る思いがする。

「何やってんだよ」

精一杯の大声でさえ、自分を鼓舞する為の虚勢なのだ。

「…六太？」

尚隆は振り返った。居るはずの無いものの声が、何故聞こえる？しかし、そこに居るはずの無いものはいた。何度見ても見慣れぬ獣の姿形をして。

人である時と唯一変わらない澄んだ濃紫の瞳から水滴が一つ、こぼ

れ落ちた。同時に転変が解け、少年が姿を現す。

「尚隆。何でこんな所にいるんだよ」

素っ裸で泣きながら問いかけるには、我ながら間の抜けた質問だと思ふ。

尚隆は笑った。

「所謂、雁の終焉のひとつだ。まあ…」

自分の羽織っていた白の長巾を少年に放ってから、言葉が続ける。白い衣は弔事に用いられるのが、常世のしきたりである。

「馬鹿な麒麟が追ってくるのは計算外だったがな」

尚隆は天を仰ぎ笑う。

「馬鹿はてめえだ!!」

激しい六太の感情を真正面から受けて、尚隆は少し眉を上げてみせた。

「理由がねえよ」

また自分が俯いている事に気がついて。六太は面を上げた。

「こんなことする、理由がねえよ」

引き倒して、殴って、罵倒してやりたいのに口も身体もまったく動かなかった。

代わりに嗚咽が漏れた。押し殺そうとすればするほど、後からあとから止めどなく溢れてくる。

「六太」

「お前は、」

尚隆の言葉を遮り、

「お前はもう俺の主じゃねえ」

「そうか、延台輔。俺は麒麟にも見放されたか」

——ちがう。

言葉にすればするほど、本心とは隔離していく解釈。口を噤む訳にはいかない。

全身が、こんなにも主に主でいてほしいと求めているのに。

どうすれば、尚隆に伝わる？

「阿呆。お前がそんな死にそうな顔しててどうする。死ぬのは俺だぞ」

「一人はいやだ。一人はいやだ。行くなら俺も一緒に行くぞ」

「……」

さぞやあきれ果てた顔をしているだろうと思った。しかし、六太に向けられていたのは意外にも皮肉のない優しい目だった。初めての表情を見たのは、建国五十年の祝賀。民に向かう横顔を見てこいつはこんな顔ができるのかと驚いた。同時に嫉妬めいた感情を持ったのだ。俺には決して向ける事はないだろうと。

周りを守る為に強がる振りをしているとしても、一国の行く末は己一人では抱えきれない重荷だった。尚隆に寄りかからずにはいられなかった。それを許してくれる唯一の存在。そして六太自身が甘えることを許すただ一人の人物。

「六太、お前がここに来るとは思っていなかった」

ふっと笑うように息を漏らした尚隆の声は、驚くほど穏やかで優しくかった。

「こういう時に、お前は改めて俺の半身なのだと感じる。いささか足りない半身ではあるが」

——余計な尾ひれはつけんな。

「だからこそ、己の半身を、お前を残していききたい。これは俺の王としての最後のエゴなんだ」

口調は淡々と。そして徐に、

「これを覚えているか」

尚隆が懷から取り出したのは、紙に押した一輪の花だった。外見は小さく儂げだが、秘めた強さを感じさせる。

「更夜……」

六太は呟いた。

夜の名に相応しい紫紺色。しかしそれは真夜中の闇ではない。陽が
上る前の新たな生を生み出す頃合いの曙。
大切な花だった。大切な友の名をつけた。

「忘れるわけないだろ」

「それではこの意味も覚えているはずだな」
「忘れない。しかし口に出したくない。」

「忘れたとは言わせん」

「わかってるよ」

「では、受け取れ」

「いやだ」

六太はその場にうずくまった。すべてのものから身を守るように縮
こまった。

「尚隆、止めてくれ。俺はこんな別れをするためにその花をお前に
やったんじゃない」

花奉げ

時はさかのぼる。

雁国首都関弓では、延王尚隆の治世七百年を寿ぐ式典が盛大に行われていた。

いまや十二国でその国力に並ぶものの無い雁の威信をかけての慶賀祝事の最中、罰当たりな王と麒麟は王宮を抜け出した。

警備網はいつもの数倍にも敷かれていたが、それは主を外部侵入者から守るものであって内からの愚かな逃亡者を捕縛する為のもではなかった。

買付けの下官たちに混ざって通常より容易に抜け出せたぐらいだ。

通常の政務と併行して行われる式典の準備による連日の激務に疲労困憊しているのか、うるさ方からの咎めもここ最近とんと無い。

街で賃借した赤虎の鞍上で二人はのうのうと会話を始めた。厩舎の警護は堅く、スウグのみけは持ち出せなかったのだ。

「朱衡も帷端も肝心な所で爪が甘いよな」

罰当たり宰相の罰当たり発言に同意したのはこれまた罰当たりな王である。

「然り。だが、お前に言われてはあいつらも立つ瀬がない」

六太は側近たちの顔を思い浮かべた。

「怒る気力もないだろうなー今は。今回ばかりは同情する」

「主犯がいう言葉じゃないだろう“はいそうですか。同情してくれてありがとう。台輔はやはりお優しい”とは誰も言わんぞ」

「よくて半殺し。悪くて生殺し」

「お前の場合、いけいけしゃあしゃあとフォローのつもりなんだろうが神経を逆撫するような言動の実績数知れないからな。釘は刺しておく。一応な」

ま、と尚隆は続ける。

「それが馬鹿きりんの本能ならば俺は寛容になるだけだ。寛容にその場か

らたち消える」

「逃げて後でお仕置きが倍になるってのは、いつまでたっても学ばないんだよな馬鹿（お前）は」

「八百年も生きると動物も口だけは物を言うようになる…ところでどこに行くんだ？」

そもそも今回の逃亡は六太の強い要望だった。いつもは尚隆が握る乗騎の手綱も今は六太の手のうちにある。

「秘密」

六太が冗談めかして言った。尚隆は一笑に付した。

「また性懲りもなく更夜がらみだろ」

「……」

「下界に友達すくないもんなお前」

「……」

「大体、お前空気読まずに感情のまま突っ走れば友達なんてできる訳な…うお?!」

調子に乗って凶星をつきすぎたか、六太が赤虎を急降下させたため、尚隆はバランスを崩した。彼の日頃の鍛錬がなければ、地面に落下していただろう。

「殺すつもりか？」

「お前簡単には死ななそうだから、さっくりとどめをさしてやるよ」

「慈悲深い生き物ねえ…」

尚隆は面白そうに、にやにやと笑った。

黄海にほどこかい、内海に面した雁国土。沿岸は切り立った岩場と引き潮の時だけ顔を見せる狭い砂浜。王と麒麟を乗せた赤虎は音無く浜に舞い降りた。

六太は尚隆に一瞥もくれず、すたすたと岸壁めがけて歩を進める。

ここが六太と無二の親友の出会いの場所であると、誰が知っているだろう。尚隆でさえ、知らないのに。

「六太」

六太は振り返らない。小走りの歩調も緩めない。もともと王と麒麟には圧倒的な身長差があるため、尚隆が六太を追うのは容易だったが、何も説明無く息弾ませて目的に向かう少年を見るとついつい茶々をいれたくもなるのだ。

「六太」

何度目かの呼びかけはもう尚隆自身も惰性で呼んでいたので、その瞬間にぴたりと歩みをとめた六太につんのめった。

「尚隆、見ろよ」

「なんだ」

尚隆の呼びかけに静止した訳ではないようだ。

「早く」

「なんだ」

「これ」

六太の指先に指し示されたもの。それは一輪の青い花だった。小さな小さな花だが、荒涼とした岩場に凜と咲く姿は、気高い自負を感じさせる。

「プライドのある花だ」

尚隆はそう評した。

「で、どこから持ってきた？」

「……」

「蓬莱か」

「……」

「お前、考えなしもいい加減にしないと失道するぞ」

「……」

そっぽを向いた。尚隆はそのいささか子供じみた態度に苦笑する。

——まったく、うちの麒麟はいつまで小童のつもりだ。

「馬鹿。国に変なもの持ち込むな。ひとつ病。ふたつ民を脅かすもの。みつつ天帝の怒りをかうもの。いいかこれが雁国の非失道三原則だ」

六太が蓬萊から帰った後、熱を出すたびに肝が冷える。しかし、蓬萊偵察を辞めさせる気は毛頭無い。六太の蓬萊での確実な情報収集は雁国の発展に確実に一役かっている。そして深層心理にある故郷へのほんのいくばくかの郷愁も六太の持ち帰る土産話によって立ち消えたり、満たされたりしているのだ。

「ま、無事に持ってこられたってことは天綱の許容範囲内ということだろうがな」

「だろー??」

途端に調子づいた六太に尚隆はさらに苦笑を漏らす。

「名前は？」

「は？」

「この花の名前。あるのだろうか？」

「勿忘草」

「どういう意味だ？」

浜に、指で字を書いた。

——汝我を忘れること勿れ。

「名前を聞いたら、持つてこずにはいられなかった。俺には、忘れたくないものがたくさんある」

尚隆は何を、とは問わない。忘れたくないものは確かに在る。

「これを戒めにしたんだ」

尚隆は何を、とは問わない。忘れてはならないものも確かに在る。

「名前を決めねばならんな」

そう言った尚隆を六太が振り仰いだ。尚隆はまっすぐに視線を返す。「この花はこれから雁の国土に根を張るのだ。蓬萊風の名前では民が呼びずらかろう」

麒麟の内心は、分かっている。

「あるのだろう？付きたい名が」

六太は素直に頷いた。

「…更夜」

尚隆は笑わなかった。

「六太、俺はこの花が気に入った」

目を細めて、青い花に顔を近づける。

「毎年、俺に献上してくれるか」

六太は頷きながらも、

「…この花は、来年には枯れているかもしれない。」

風土が違うところに根付いた花の命は如何ばかりか。それが少し六太の気を重くする。

「六太。頼みがある」

「…なんだ」

「お前が数百年前に蓬萊から持ち帰った書物に“押し花”という項があっただろう」

花の加工、という叙情的な行為が面白くて、二人で顔をつき合わせ読んで読んだことがあった。

「それが見たい」

それは尚隆の最上の心遣い。“更夜は永遠也”と。

——だからこいつにはかなわない…。

内心の思い遣りをあくまで表に出さぬというなら、俺も道化としてとことんお前につきあおう。

「この花が、欲しいのか」

「欲しいな」

「では、くれてやる。お前は俺の望みを叶えてくれた」

あんなにも重くてつぶれそうだった重圧を、六太も含めて引き取ってくれた。民に笑顔を取り戻してくれた。六太が泣かない世の中を整えてくれた。雁は世に誇れる大国に成った。

いくつあげられるのだろう。この男が己にしてくれたことは。

「…どこかで、聞いた会話だと思わんか」

「ああ、俺もそう思ってた」

声を立てて笑うほど若くもない二人は、齡相応の笑みを交わし合った。蓄積された積年の絆。

「別れの時はお前にやろう。いつまでも色あせない勿忘草…更夜を」
六太と尚隆が仰いだ空は、雲一つなくどこまでも蒼い。

「話し相手がいなくなってもボケないようにな。汝、忘れること勿れ」

「たまには真面目にオチをつけろ」

尚隆の軽口は、半ば快く、半ば腹が立つ。

*

*

*

*

*

数月後、側近たちの怒りも半ば解けた。長寿な分、怒りの持続時間も長い。

押し花になった“更夜”は延国宰輔の手により、内殿で王に献上された。水分を飛ばした花は艶やかに、更にその色に深みを増したようだ。

「ほう、これは美しいな」

「謹んで、“更夜”を献上致します」

「確かに、受け取った」

「…別れなんて言うなよ」

答えは無かった。尚隆の視線は六太も、更夜も飛び越えた彼方に当たられていて、表情を読み取ることも難かった。

心露に

階の途中で、二人は対峙していた。

「この花は、受け取れない」

ふら、と立ち上がり、六太は差し出された手を押し返す。紫の瞳を強くして、真っ直ぐに尚隆を向いた。

「お前の望みは十分に叶えたつもりだ」

その眼差しを真正面から受け止めながら、尚隆は漏らす。

「もう、いいだろう」

階の最上部に位置する、扉に目をくれた。

「六太。俺は天帝の意志ではなく、俺の意志で動きたいんだ」

この常世では、王も麒麟も天の意志で生まれる。尚隆が今日ここで位を返上するという行為も、もしかしたらすでに決められた事…天帝の手の内で戯れるようなことなのかもしれない。

——それでも足掻かずにはいられない。

尚隆には常人にはるかに勝る矜持がある。運命に身を任せるなどといった超然とした態度は千代に生きようが絶対に己には持ちえぬものだろう。

八百年の長寿も、尚隆という人間を何ら変えなかった。

まったく、不器用だと思う。

「俺が王になったのは、天が決めたことではない。俺が決めたことだ」

たとえそれが真実でなくても。自分ではそう思って、死にたいではないか。

——俺には、王として一国を造ってきた自負がある。

「六太。俺は怖い」

尚隆は、はっきりと言った。

――怖い？

六太は、慄いた。

そんな言葉が尚隆の口から聞くととは。

心が、この豪胆な男をそこまで追いつめていたのかという無念さに
挟られた。

「国を御すことが、俺は好きだ。例え清廉な水面の下に糞塗れの汚
水が漂っているようにとも、その裏も汚さも含めて政を行うことを自ら
の天職と思っている。だから、あの時。一度取り返しのつかない失
態をした俺にもう一度機会をくれるというお前の頼みを引き受けた」
尚隆は、誰にともなく淡々と語る。

「だが、この常世で政を行うにつけて、いつも頭から離れないこと
がある」

一旦、口を噤んだ。沈黙。期せずして二人の視線が交差した。

六太の真摯な眼差しを受けて、尚隆は続けた。

「他の国の麒麟失道の報、様々な形の終焉を見るにつけ、彼の王の
意思か、天の意思かという疑問が頭を過る。雁の栄える様を見るに
つけ、果たしてそれは自身の功績なのかと疑う自分が在る。八百年
もの間、この国が繁栄を続けるのは俺の手腕か。それともすべては
天帝に定められた運命だったのか……」

――もし、すでに天によって定められた道理をなぞっているとした
ら。とてもやりきれない。そして、時が蓄積すればするほど、その
やりきれなさは増すだろう。

“天命”か“人為”か。その疑問への心の許容量はすでに目一杯に
なっている。

「政の途上に正解などない。それを、道半ばにして天帝に判断されてたまるかと」

淡々とした口調が、崩れる。

「思いながらも俺は機嫌を伺っている。それを俺の矜持が許さない」
末尾は歯噛みして、悔しさが滲んだ。

＊ ＊ ＊
＊ ＊ ＊

「ごめん」

六太は尚隆の白い袖を掴んだ。

「ごめん、尚隆」

詫びて、どうなることでもないけれど。

――逃げていた。

尚隆の葛藤に気づいていないわけではなかった。

真っ向から向かうのを恐れ、常に核心に背を向けて。

そのうち、薄氷の上にいることを忘れ、尚隆の築いた土壌は天変地異も及ばぬ頑丈な一枚岩だと思い込んでしまった。割れるまでは気づかずにいようと。

そして、追い詰めて一人で下させてしまった決断に、自分は最後になって介入し、だだをこねている。酷く情けなかった。

――けれど。

わがままでも、この尚隆の意思は受け取れない。

「ごめんな。尚隆。お前が、国を欲しいと言ってくれたあの日から」
紫の瞳に、深い悔いが浮かぶ。

「お前の意思などお構いなしに、俺は国造りをゆだねて来た。お前の大きな背に安心しきって、すべてを負わせてしまった」

国政という重荷に、天の意思という重石までつけて。

「お前のことを責めてるんじゃない。麒麟が役にたたん事など承知の上だ」

なんて言い草だ。

けれど、それは尚隆の好きな詞遊び。

六太に気を遣わせまいとする心遣い。それにずっと、甘えてきた。

——だから、今度は俺がお前の心を安くしよう。

「天は咎無いお前を見放さない」

六太は断固として言い放った。

そのはっきりとした物言いに、尚隆が不思議そうな目を向けた。

「もし、天が咎なくお前を位から降ろそうとするのなら」

吹くはずもない風が、吹いた。

真下から、煽るように目の前の少年の髪をかき上げる。髪は金の絹糸のように、豊かに光を湛えて見事な錦と成り、はためく。

紫の瞳が、金の光を映して煌めいた。

神獣。

その名に相応しい限りなく清らかな様だった。

「俺がそれを許さない」

天に問う

——無理だろう。

そう思いながらも、尚隆は神々しい六太の姿に心震えた。

——だが、この馬鹿な麒麟は本気で言っているらしい。

「見せてやろうか」

挑むように啖呵を切って、尚隆の視界から六太が消えた。膝を折ったのだ。

「六太？」

そのまま、ゆっくりと六太は額づいた。

「私の意を以て主上にお迎えする。これより後、詔明に背かず、御前を離れず、忠誠を誓うと誓約申し上げる」
麒麟の行為に、尚隆が目を見開く。

「二度目の天啓を受けちゃったのか？」

六太が顔を上げると、呆れ顔の主がいた。

「いいや」

至極、真面目に。麒麟は金の髪を振った。

「天からの啓示ではない。俺の意思でやったことだ」

「はあ？」

思わず、間拔けた声が尚隆の口から出た。

「俺が。お前を王に選んだ」

——この意味が分かるか？ 尚隆。お前を失うくらいなら、この身を懸けて天に問う。

天はこの麒麟の…俺の勝手な行動を罰するか。それとも咎めなしか。

「延麒として生を受け、尚隆を王に据えたこの俺がいる限り。お前には玉座にいてもらう」

罰すれば共に倒れ、咎めなければ尚隆は“天”ではなく“麒麟”の意思で成った王となる。

六太の、身を賭した最高の博打。天帝への大胆な挑戦。尚隆はしばし沈黙した。そして徐に、あたり一帯に響く大声で笑った。

「天帝の目の前でいい度胸だ。さすが馬鹿なだけある」
心底、感心した態でそう言った。

「褒めてない」
憮然として六太。

「いや、幾ら年を重ねても何も長ずる処のない糞餓鬼だと思っていたが」

「褒めてない」

「なかなかどうして大した度胸だ。見直したぞ延台輔」

「八百年ごしで、か」

ただ、嘆息。

「さあ、尚隆」

六太は焦れて促した。

「許す、と」

聞きたい答えは、まだ聞けていない。

「許す、と言え」

尚隆は大仰に肩を竦めた。

その所作に六太の目が少し、潤んだ。

その態度は、延の王が折れたことを物語っていたから。

「早く」

一瞬でも早くその気持ちを確かめたくて、急かす。

尚隆は六太の内心が手に取るように見えるのだろう、口の端で少し

笑った。

その口で大きく息を吸うと、一瞬止めて。
集めた気と共に言葉を吐いた。

「許す」

その言葉が発せられた瞬間、麒麟の額が鈍く光った。
六太の額は尚隆の足甲にあてられた。

＊ ＊ ＊
＊ ＊ ＊

「俺の勝ち」

頭を起こすが早いか、六太がにやりと笑った。

「天の意志などどうにでもならあ」

気強く、不真面目に、振る舞う。

「明日、死んでるかもしれんぞ」

尚隆の脅しにも、怖いものなしの麒麟はめげない。

「けど、その結果は俺の意思だろ？」

「然り」

尚隆は満足そうに笑った。

六太も心から、笑みを浮かべた。

六太は察していた。

もう、この男がこの階を上る気はないことを。

崇山の麓から、みけに跨り二人は飛翔した。

騎上で、六太が尚隆に問う。

「この花の、蓬萊の名。覚えてるか？」

――汝我を忘れること勿れ。

尚隆の返事を待たずに六太が唱える。

「別れの時の言葉に聞こえるか？けど、近くにいすぎて存在を忘れられてる奴の自己主張ともとれる。他人事のような気がしなかったんだよ」

後ろで手綱を握る、唯一無二の主を振り仰ぐ。

「俺をわすれんな」

尚隆の畜生め、の意を込めて指を立てる。

「俺はお前を頼みにしているつもりだが？…一応な」

「繊細な俺をもっともーつといたわって欲しい訳」

くくっ、と尚隆は息を漏らすように低く笑った。

「とことん自己中で難儀な生き物め。分かった。位の返上時には説得に百年かけてもお前の同意を得よう」

ただし、と尚隆は指を立てる。

「これだけは譲らんからな。お前は雁に置いていく」

「じゃ、いつまで経っても交渉は決裂だな」

六太は、屈託無く破顔した。

そして。

更夜の花は雁国延王尚隆の治世の実の終焉まで、王の手元から離れることはなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1531p/>

万乗の途 勿忘の草

2010年11月26日22時16分発行